滋賀文化財だより
NO. 160
1991. 7. 20
●編集発行／財団法人滋賀県文化財保護協会

187. 栗東町岡遺跡の発掘調査(1989年度)

1. はじめに

栗東町岡遺跡は、栗太郡栗東町下戸山付近に所在する。1986年度、団体営ほ場整備事業にともなう調査により、大規模な建物群が検出され、栗太郡衙と推定されている。

その後、1988年には、団体営ほ場整備事業の排水路部分が発掘され、建物群に連なると思われる倉庫跡が検出された。

今回報告する1989年度の調査は、名神高速道路の拡幅工事に伴うもので、1988年度の調査トレンチに隣接してトレンチが設けられた。調査面積は、560㎡と狭小であるが、1988年度調査トレンチに続く遺構で、全貌が明らかになったものもあり、大きな成果が得られた。

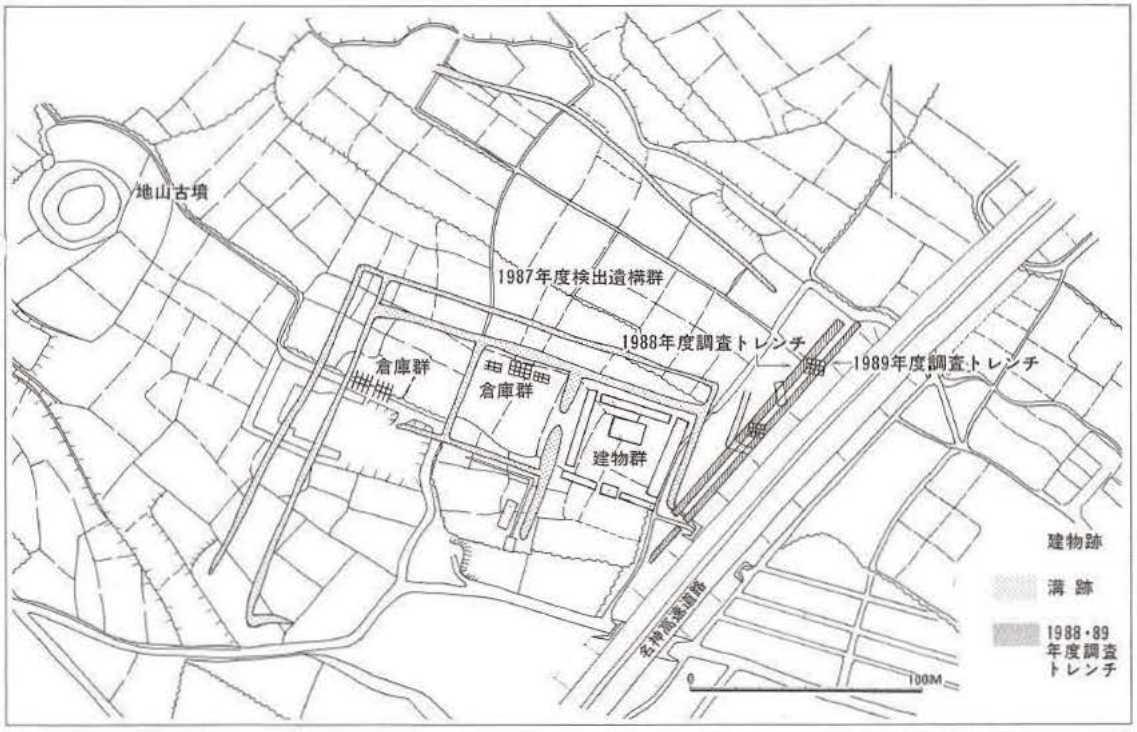
2. 位置と環境

岡遺跡は、瀬田丘陵から派生する舌状の丘陵上に所在する。丘陵の先端には、全長89m、周濠をあわせると111mの大きさの帆立貝形古墳の地山古墳があり、古墳の東側には小古墳も確認され、地山古墳を首長墓とする古墳群をなしていたと思われる。

1987年の調査では、一辺約160mの二重の環濠により区画された大区画の中に、一辺約50mの小区画が3箇所確認されている。小区画の中の一箇所には、門と回廊状建物に囲まれた6間×2間（四面庇と考えると）の正殿風の建物がある。

他の小区画では、倉庫と推定される総柱の建物が検出されている。

1988年の調査では、正殿風の建物の北東部で、やはり総柱の倉庫と思われる建物が検出された。また、南北方向に延びていた区画溝が、90°向きを変え、東西方向へ延びることが確認され、小区画が正殿風建物の東側にも存在する可能性がもたれている。



第1図　岡遺跡全体図

西トレンチ南壁面土層断面図
① 旧表土灰色粘土
② 旧表土淡橙灰色粘土
③ 橙灰色粘土
④ 灰褐色砂質土
⑤ 灰橙色粘土
⑥ ⑤よりやや色が薄い
⑦ 橙色砂礫層
⑧ ②と⑤の混層
⑨ ②と⑤と③の混層
⑩ ③にやや灰色混る
⑪ ⑩よりやや色が薄い
地山＝橙色粘土

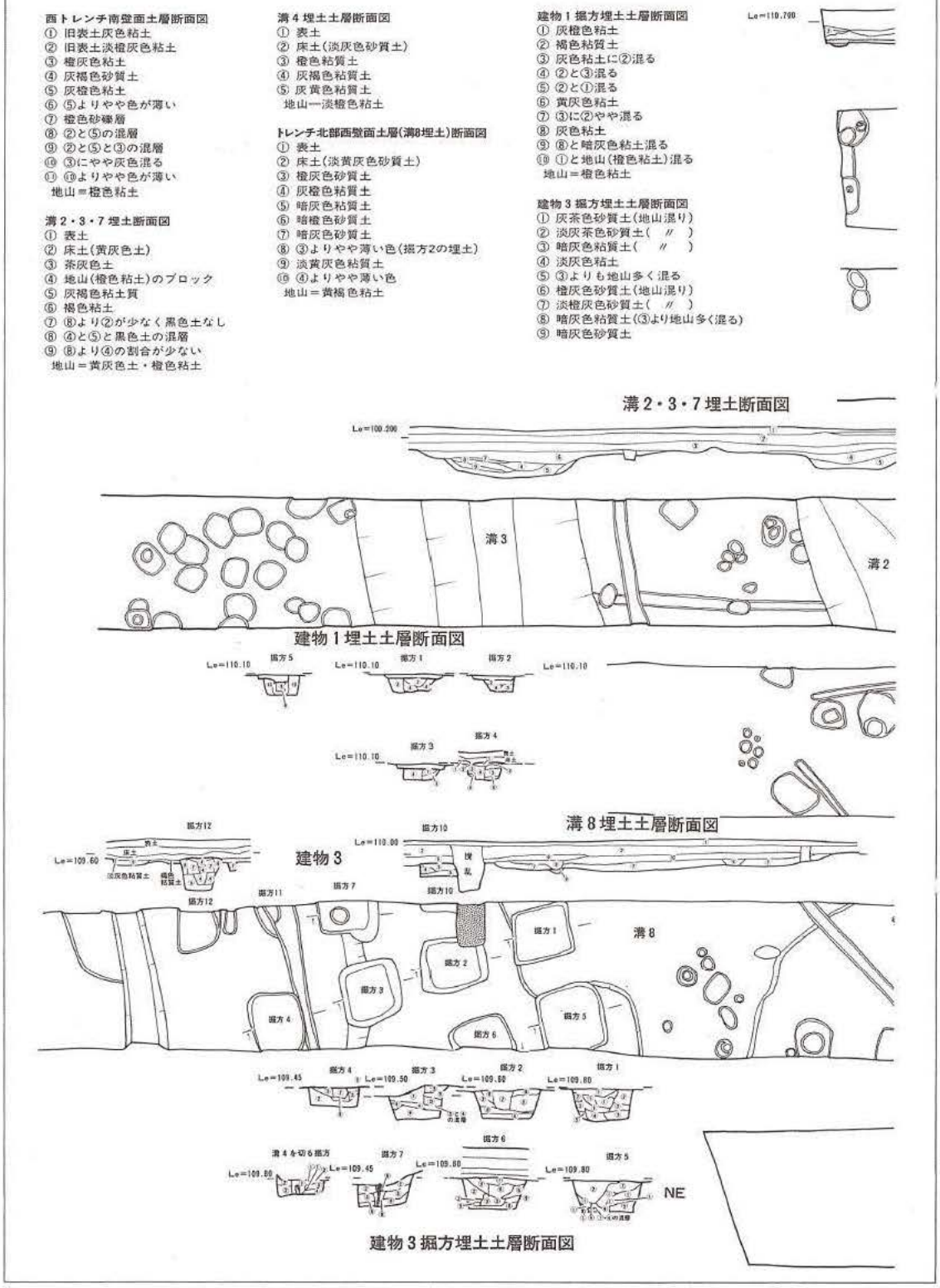
溝2・3・7埋土断面図
① 表土
② 床土(黄灰色土)
③ 茶灰色土
④ 地山(橙色粘土)のブロック
⑤ 灰褐色粘土質
⑥ 褐色粘土
⑦ ⑧より②が少なく黒色土なし
⑧ ④と⑤と黒色土の混層
⑨ ⑧より④の割合が少ない
地山＝黄灰色土・橙色粘土

溝4埋土土層断面図
① 表土
② 床土(淡灰色砂質土)
③ 橙色粘質土
④ 灰褐色粘質土
⑤ 灰黄色粘質土
地山＝淡橙色粘土

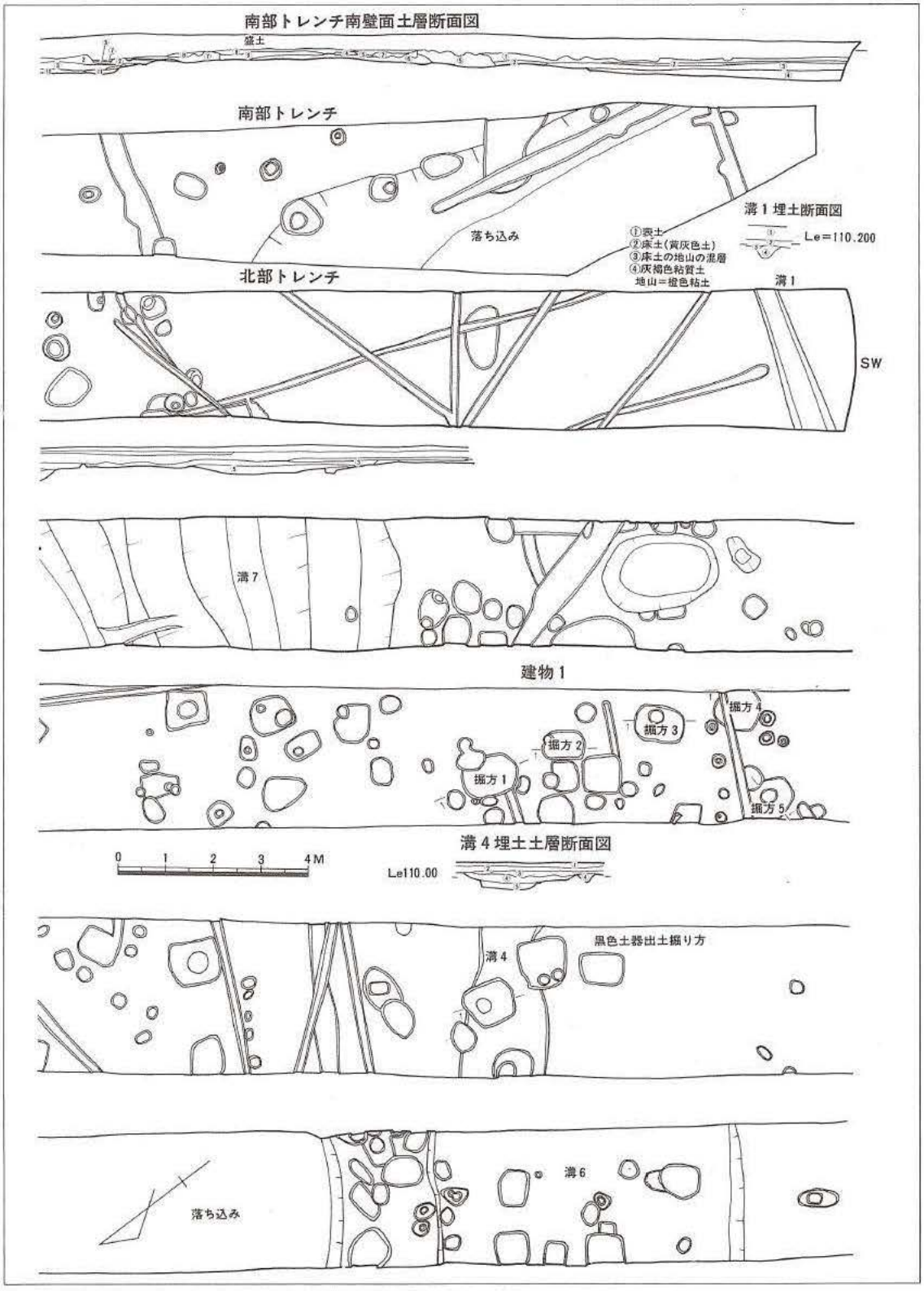
トレンチ北部西壁面土層(溝8埋土)断面図
① 表土
② 床土(淡黄灰色砂質土)
③ 橙灰色砂質土
④ 灰橙色粘質土
⑤ 暗灰色粘質土
⑥ 暗橙色砂質土
⑦ 暗灰色砂質土
⑧ ③よりやや薄い色(掘方2の埋土)
⑨ 淡黄灰色粘質土
⑩ ④よりやや薄い色
地山＝黄褐色粘土

建物1掘方埋土土層断面図
① 灰橙色粘土
② 褐色粘質土
③ 灰色粘土に②混る
④ ②と③混る
⑤ ②と①混る
⑥ 黄灰色粘土
⑦ ③に②やや混る
⑧ 灰色粘土
⑨ ⑧と暗灰色粘土混る
⑩ ①と地山(橙色粘土)混る
地山＝橙色粘土

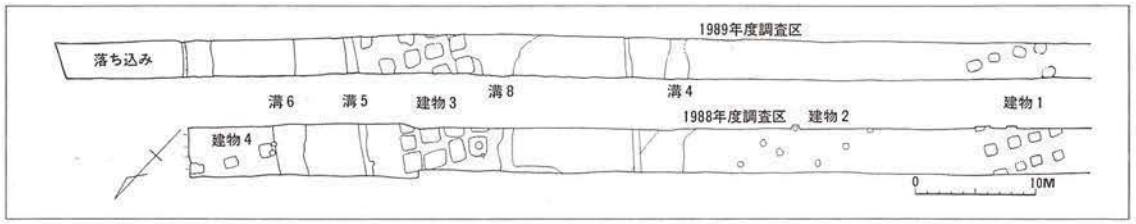
建物3掘方埋土土層断面図
① 灰茶色砂質土(地山混り)
② 淡灰茶色砂質土(　〃　)
③ 暗灰色粘質土(　〃　)
④ 淡灰色粘土
⑤ ③よりも地山多く混る
⑥ 橙灰色砂質土(地山混り)
⑦ 淡橙灰色砂質土(　〃　)
⑧ 暗灰色粘質土(③より地山多く混る)
⑨ 暗灰色砂質土



第2図　岡遺跡（1989年度）遺構図・土層断面図（1）



第３図　岡遺跡（1989年度）遺構図・土層断面図（２）



第4図　岡遺跡主要遺構（その1）

3．調査

①調査トレンチ

調査トレンチは、調査の進捗に応じて北部トレンチ（幅約3～4m、長さ約130m）と南部トレンチ（幅約3～4m、長さ約20m）の二箇所設定した。

北部トレンチの北端と、南部トレンチの南端は自然地形の落ち込みがみられ、落ち込み部には遺構がほとんどみられないことから、この落ち込みに狭まれた部分（ここが丘陵の尾根にあたる）が遺跡の範囲であることが分かる。なお標高は東京湾の平均海面高(T・P)による。

②基本土層

南部トレンチでは、地表下20～30cmに遺構面がある。北部トレンチの南端では、地表下45cm程度に遺構面がある。表土下は一層のみで、地山は橙色粘土である。

北部トレンチ中央部では、遺構面は地表下40～55cm、表土下は2層で、地山は黄灰色土と橙色粘土である。北部トレンチ北部では、遺構面は地表下20～50cmであり地山は黄褐色粘土である。遺構の標高は、南部トレンチにおいて約110.20m、北部トレンチ南端では　約110.20m、北部トレンチ中央部では110.15m～109.90m、建物3西半分では、109.80mであるが建物3の掘方3・7の中心を通って地形は一段下っており、掘方4・12付近では109.45mを測る。なお、遺物包含層はなく、遺物はすべて遺構面直上から出土する。

③遺構

遺構としては、溝・土坑・ピットなど多くが検出されたが、今回は、1988年度の調査で検出されたものと関連するものを中心に述べてみたい。

溝1は、北部トレンチの南端に存在する。1988年度に検出されたものの延長であるが、幅は、西端においては、0.95mあるが、東端においては 0.5mと狭くなっており、深さは0.27mである。この溝は、区画溝の一つであるが、東へ行くにつれて狭く、浅くなっていくものと思われる。埋土は灰褐色粘土である。

溝7は、1988年度トレンチから続く溝で、幅6m、深さ 0.3mを測る。

溝2は、1988年度トレンチから続く溝で、幅4.2m、深さ 0.5mを測る。溝2は、1988年度トレンチでは、南北から東西へ約90°向きを変えており、区画溝の1つである。埋土から、須恵器杯(6－1)、土師器が出土している。

溝3は、幅3.5m、深さ0.6mを測るやや深い溝で、1988年度トレンチから延びてきている。

建物1は、1988年度調査トレンチの建物跡と同一のもので、3間×(4間以上)の総柱の建物である。掘方は隅丸方形状で、長軸1.0m～1.3m、短軸1.0～0.7m、深さ0.3～0.44mである。

この総柱の建物は（1987年度調査区の）区画内の総柱の建物の方位と合致している。

溝4は、1988年度トレンチから延びる溝で、幅は西端で1.9m、東端で1.4m、深さ0.3mを測る。溝幅は1988年度トレンチに比べて狭くなっている。

以上述べた 溝 1、7、2、3、4についての埋土は、1層から6層までの層数を数えることができるが、いずれも、最下層は、灰褐色粘質土である。（溝4の場合、最下層は、灰黄色粘質土であるが、これは、地山の上面である可能性がある。）

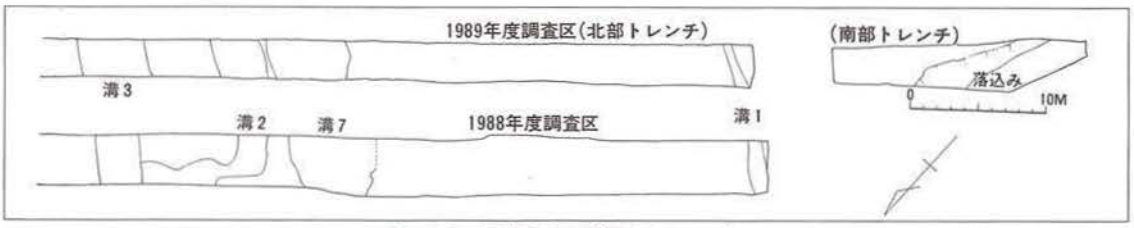
溝4を切る掘方。この掘方は単独で存在し、関連する他の掘方は、トレンチの外に出ていると思われる。長軸1.2m、短軸1.0mの五角形に近い形で、深さ0.45mを測る。

溝8は、1988年トレンチから続いているが、トレンチ中央で大きく拡がってしまい、深さも0.25mと浅く水溜り状になってしまう。幅は北端で2.5m、南端で7.9mを測る。埋土の最下層は、暗灰色砂質土である。東側の肩を建物3の掘方に切られている。溝8からは、須恵器、土師器、黒色土器、灰釉陶器が出土しているがいずれも小片である。

建物3は、1988年トレンチの建物と同一で、4間×3間の総柱の建物で、掘方は、一辺1.2m～1.5mの方形である。深さは0.6～0.7mで、埋土は、細かく分層できる。中心部に直径0.3m程度の柱痕を残すものがある。この建物は約10m×7mの規模である。建物1も約10m×7mの規模になる。

建物1と建物3は、掘方の深さに違いはあるが、方向も同じであり、同規模の建物として何らかの関連性をもとめることができる。掘方5から土師器片が出土。

なお掘方10．7．11．12は、建物1の主軸と方向が違うことから別の建物と思われる。



第5図　岡遺跡主要遺構（その2）

溝6は、やはり1988年度トレンチから続く溝であるが、幅6.8mに広がっている。浅く、溝内に掘方を有する点など、溝のイメージは薄く、水溜り状を呈する。遺物は、灰釉長頸壺の口縁6図－2円面硯6図－3、平瓦6図－4が出土している。

南部トレンチでは、東から西に向って大きく自然の落ち込みがある。上段の部分には掘方、溝等がある。また落ち込みの稜線上に掘方が並んでいるのは、柵のようなものがあったのかもしれない。南部トレンチでは、遺構面直上から須恵器甕体部片、須恵器片、土師器片、近世陶器が出土しているが、いずれも小片である。

④遺物

出土遺物はいずれも小片で、実測可能なものが少なかったができうるかぎり図面を取ってみた。

第6図－1（以下番号のみ）は、須恵器杯身である。溝2出土品で色調は暗灰色である。

2は、灰釉長頸壺の口縁である。溝6出土品である。色調は灰白色である。焼成も良好である。

3は、円面硯の脚部である。溝6出土品である。色調は灰色で焼成は良好である。

4は、平瓦である。溝6出土品である。全体に磨耗が著しい。焼成も悪く、やわらかい。胎土は黄灰色土で炭素吸着部は暗灰色、白色砂粒を多く含み、凸部に格子叩きを有す。

13は、黒色土器の碗である。北部調査区中央部の掘方から出土している。内面のみ炭素が吸着しており、胎土は橙色である。

遺構出土品は以上5点のみであり、以下は包含層出土品である。

5は、須恵器杯身である。色調は青灰色、胎土・焼成は良好である。

6は、灰釉長頸壺の頸部と肩部である。色調は灰白色で2に以ている。胎土・焼成ともに良好である。

7は、須恵器杯身である。焼成はやや悪く、やわらかい。色調は淡灰色で、胎土は白色・黒色砂粒・クサリ礫を少々含む。

8は、須恵器壺の口縁である。色調は灰色であり内面に自然釉が付着する。胎土は白色砂粒・黒色砂粒を少々含む。

9は、須恵器杯身である。小片であるので口径は不明である。色調は灰色である。6～7世紀代のものと思われる。

10は、須恵器杯蓋である。小片であるので口径は不明である。色調は灰色で白色砂粒を含む。全体に磨耗している。

11は、須恵器高杯の脚部である。外面に凹線に挟まれた波状文を施す。内側は粘土をつぎ足して厚くしている。内外面に自然釉が付着する。胎土は白色砂粒を多く含む。胎土は灰色、自然釉は薄緑色である。6世紀代のものである。

12は、瓦質羽釜の口縁部である。外面に炭素が吸着している。鍔は欠落している。胎土は白色砂粒を多く含み粗い。。外面は黒色、内面および断面は、淡灰橙色である。

14は、瓦質羽釜である。内外面に炭素が吸着している。全体にやわらかく剥離が多い。胎土は、白色砂粒を多く含み、粗い。色調は内外面暗灰色、断面は淡黄色である。

15は、黒色土器碗の底部である。全体に磨耗著しい。外面に炭素吸着の痕がわずかにある。高台は退化して低い。色調は、淡黄色である。

16は、白磁の小皿である。口縁端部の釉がふきとられる「口禿皿」である。素地はうすい灰色、釉は白濁している。13世紀～14世紀代のものである。

17は、信楽擂鉢である。長石を多く含む。色調はうすい橙色である。やわらかく磨耗している。16世紀代のものである。

18は、古瀬戸灰軸碗である。胎土は灰白色で精良である。釉は淡黄色で内外面とも剥落著しい。16世紀代のものと思われる。

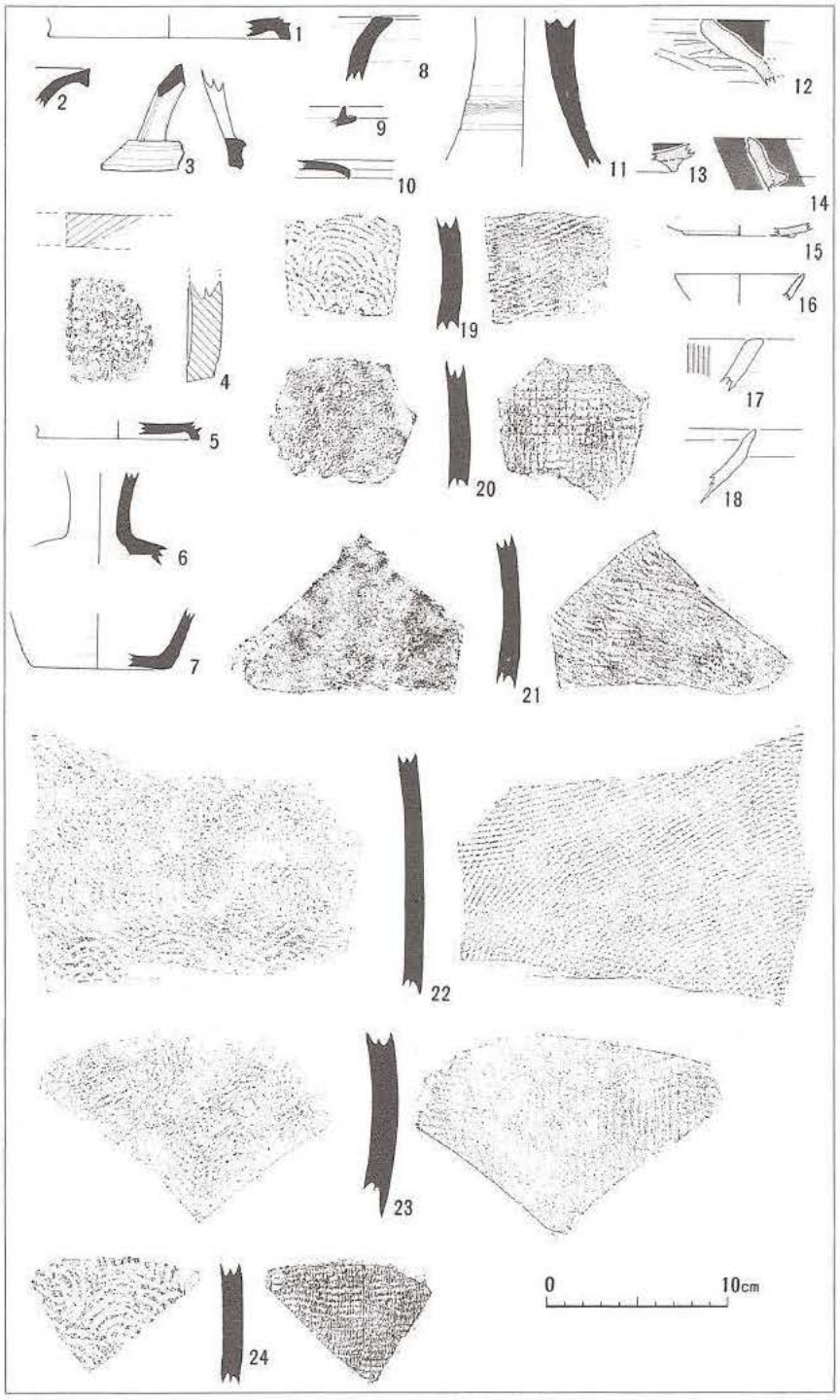
19は、外面は暗灰色、内・断面は灰色、胎土は精良である。

20は、焼成が悪くやわらかい。断面は淡橙色、内外面は淡灰色。胎土は黒色砂粒、クサリレキを含む。

21は、内・外面とも叩き目を擂り消している。色調は灰色である。

22は、色調は灰色、胎土に白色砂粒を含む。堅く焼上っている。

23は、やや厚手で、色調は灰色、白色砂粒を含む。



第６図　岡遺跡（1989年度）出土遺物実測図

胎土は緻密である。

24は、色調は外面・断面は灰色、内面は灰白色である。胎土は密で白色砂粒、黒色砂粒を含む。

３．まとめ

1989年度調査の概要を述べてきたが、そのまとめをしておきたい。今回の調査は、1988年度トレンチに隣接している部分だけに、関連遺構の確認が調査の要点となった。

多く検出された溝跡については、1988年度調査区からの延長は確認されたものの、溝の方向、形態については、両トレンチで違うところもあった。

建物跡については、建物１と建物３については、ほぼ同じ規模で３間×４間の建物であることが確認された。

出土遺物については、1987年、1988年の調査とほぼ同じ時代のものが出土しているが、包含層からは６～７世紀代のものと古代・中世のものが出土しており、同遺跡の年代の広がりを感じさせる。

おわりに、この報告を記すにあたって、栗東町文化体育振興事業団の平井寿一氏には、資料を提供していただくなど、たいへんお世話になった。記して謝意を表したい。

（稲垣　正宏）

参考文献

○「古代を考える46」―岡遺跡の検討―1987．9　古代を考える会

○「滋賀埋文ニュース」第108号 滋賀県埋蔵文化財センター